

係講義題目を見て行くうちに、神道担当として博士の名と講義題目を見出してのことであった。博士の著書を披見したのは終戦後間もなく、『神道の宗教発達史的研究』が最初であった。こう申せばまこと不勉強ぶりを披露するようなものであるけれども、始まったばかりの占領政策が、ことごとくに神道を誹謗する風潮に大に疑問を感じて、神道研究に一念発起したとき、まず手がかりとしてこの高著を繙いたわけなのである。当時のこととはほとんど棄て値で神田の古書肆の店頭に、塵にまみれていたことを覚えてゐる。おそらくは中学生の頃に接した、

神道学者としての博士の高名の記憶が、この書を選ばせたのであろうが、結果に於てはまことに成功であった。神道は宗教であり、日本の固有教というべく、わけて國家的神道に至っては古今一貫、全く日本の國民的宗教であるという博士の一千余頁の主張は、三百余頁の資料と数多くの図版写真並に精細な索引と相俟って、強い説得力を以て人に逼まる力を有っている。私は本書を基礎に資料篇の指示に従い、読書の範圍を拡げて行き、壁に

衝きあたるとそのつど、索引をたよりに本論の各章節を読み返したのであった。

昭和三十一年七月十日付で博士から書翰をいただいた。『知性と宗教——聖雄信仰の成立』惠贈のたよりである。見返しには猷呈の二字が記され、視力を喪われた博士の筆と知って、この御厚意はありがたかった。拙い読後感を呈したところ、博士から懇篤なお招きを再三忝くし、御殿場に訪れたときはことのほかよろこばれ、長時間の御指導と杉浦さんの手料理笹飯をおよばれた。後刻承れば私に長い時間を割かれたため、発熱されたとか。学問を愛し、わが国で最も大切な神道学のために万事を抛うって悔なき御熱意に深くうたれたのであった。

慎 莫 怠

皇学館大学教授 鎌田純一

皇学館が復興してまもなく、加藤玄智先生から、〃皇学館が復興して、君も関係しているようだが一度現況を話しに来てほしい〃との御手紙を頂いた。すぐに参上出来ず、早速手紙で報告申し上げたら、引続き〃君は皇学館で古語拾遺を講じているようだが、テキストには何をj用いているか、それに関連して話しておきたいことがあるから来てほしい〃と御手紙を頂いた。それでもかく御殿場にお伺いしたのであった。先生は病床に臥しておられたが、お声はしっかりされており、先ず帰りの列車の予定を尋ねられ、約二時間あることを申し上げると、最初一時間少しは私が語ろう、あと残る時間は質問なり、意見をきこうと前置きされ、少しく黙して考えられたあと、整然と講義を始めて下さった。私は一所懸命にノートしたのであった。若い私にティーレの方法論あたりから説かれて、宗教学・神道学研究法についての論で戒めて下さったのである。続いて古語拾遺のなかの「慎莫怠」について語られた。いうまでもなく、景行天皇の御代、日本武尊が東征の途次伊勢によられたとき、倭姫命が教

えさとして曰うた語であるが、加藤先生はこの語の意味深遠、実にすばらしい表現と感慨深く云われる。「慎みて怠ることなかれ」、現代の日本人に対する戒めとしても最適の語ではないかと云われて、伊勢、倭姫宮でこの語を記した神戒書、或いはお守りでもよい、そのようなものを一般に頒布するよう神宮当局へ話してほしいと云われた。倭姫宮の現況でその可能性・適否のことが私の脳裡に横切ったが、先生はそんなこと頓着なく真剣に要求されたのである。伊勢に帰って少宮司さんにこの件をお話ししたら、少しく考えておられ承りましたと云われた。これは加藤先生の御希望通りにはなっていないが、それより私には、この「慎莫怠」が深くきざみついたし、学生たちにも古語拾遺を聞くたびに講ずることとしている。慎しみて怠ること莫かれ。